

場所から考える高齢者の地域居住

第5回 当事者として地域の場所を作りあげる:「居場所ハウス」の試みから

lbasho Japan 代表/千里ニュータウン研究・情報センター 事務局長

田中 康裕

1 地域の当事者

地域居住（エイジング・イン・プレイス）は、「住み慣れた地域でその人らしく最期まで」というスローガンで表されるものである（松岡, 2011）。そして、「人間が生活することは人間がある場所を占める（take place）ということであり、人間存在の空間的形態が生活ということに他ならない」（間宮, 1999）。これらの指摘を受ければ、地域居住においては、地域の場所にどう関わり得るかの視点が重要だと考えることができる。そこでこの連載では、高齢者と地域の場所との関わりについて、いくつかの事例を紹介してきた。

この考察を通して浮かびあがってきたキーワードが、当事者である。高齢者は地域のサービスを一方的に受ける利用者ではなく、地域自体を作りあげ、そこを住み慣れた場所にしていくなのである。

今回は、筆者が継続して関わってきた、岩手県大船渡市末崎（まさき）町の「居場所ハウス」を取りあげ、高齢者が当事者となり場所を作りあげてきた具体的な姿を紹介したい^[1]。

2 居場所ハウス

「居場所ハウス」は、米国ワシントンDCの非営利法人・lbashoの呼びかけがきっかけとなり、2013年6月に東日本大震災の被災地である大船渡市末崎町にオープンした。建

物は、米国ハネウェル社の社会貢献活動部門「ハネウェル・ホームタウン・ソリューションズ」(Honeywell Hometown Solutions)の災害復興基金を受け、陸前高田市気仙町の古民家を移築・再生したものである（写真1）。オープン後の運営は、末崎町の高齢者を中心とする住民が担っている。

lbashoは、高齢者がお世話される側の弱者だと認識されている状況を変え、何歳になっても自分にできる役割を担いながら地域に住み続けることの実現を目指して活動しており、「居場所ハウス」はlbashoが掲げる8理念をベースに運営している^[2]。



写真1 古民家を移築・再生した建物

「居場所ハウス」は、木曜を除く週6日、10～16時にカフェを運営しており、コーヒー、ハーブティーなどの飲物を提供している（表1、写真2）。飲食店や店舗がほとんどない地域の状況を受けて、2014年10月からは毎月の朝市を、2015年5月からは食堂をスタートさせた（写真3～4）。

2017年4月から週3回、夕方以降の時間帯を利用して、「子どものエンパワメントいわて」が主催する「学びの部屋」が開かれている^[3]。「学びの部屋」は、震災で学習環境をなくした子どもたちが自学自習するための場所として、仮設住宅の談話室や空き住



写真2 日常の様子

表1 居場所ハウス基本情報(2019年8月現在)

オープン	2013年6月13日
住所	岩手県大船渡市末崎町
運営主体	NPO法人・居場所創造プロジェクト(2013年3月8日設立)
運営日時	10時～16時(事前の予約で21時まで貸し切り利用可) 食堂:11時半～13時半
定休日	木曜
朝市	毎月第3土曜 9時～12時
カフェメニュー	コーヒー(200円)、ハーブティ(200円)、ゆずティー(200円)、ソフトクリーム(250円)など(緑茶・麦茶は無料で提供)
昼食メニュー	うどん、そば、ラーメン、カレーライス、中華飯、週替わりランチなど(400～600円)(事前の予約は不要)
建物	陸前高田市気仙町の築60年の古民家を移築・再生 (建物はNPO法人が所有、土地は賃貸)
敷地面積	966㎡
延床面積	115.15㎡

戸で開かれていたものだが、仮設住宅の閉鎖に伴い「居場所ハウス」に場所を移して継続されることになった。

「居場所ハウス」の来訪者の中心は地域の高齢者だが、学校が休みの日などには子どもが遊びに来たり、親子がイベントに参加したりすることもある。2013年6月のオープンから2019年6月末までの約6年間の来訪者は、延べ42,068人、1日平均にすると23.0人になる^[4]。

3 運営体制の変化

東日本大震災の被災地には、数多くの場所が開かれた。被災地への支援の終了、仮設住宅の閉鎖、目的の達成などの理由から活動を終える場所がある中で、「居場所ハウス」は現在でも、末崎町の高齢者を中心とする住民により運営が継続されている。

ただし、「居場所ハウス」の運営体制はオープン時点で確立してわけではなかった。ここでは、運営体制の基礎が築かれるまでの時期に焦点をあて、運営体制がどのような経緯で築かれてきたのかをみる。

オープン直後

「居場所ハウス」は、プロジェクトの当初から末崎町の住民が運営を担う場所として計画されていた。ただし、既存の団体が運営を担うのではなく、運営メンバーを集めていくと

ころから始められたプロジェクトであるため、当初は中心となる運営メンバーは存在していなかった。オープンまではIbashoをはじめ、末崎町外の主体が中心となりプロジェクトが進められていった^[5]。

2012年5月14日から2013年5月8日までに、末崎町の住民らを変えて6回のワークショップが開かれるなど、「居場所ハウス」は1年以上の準備期間を経てオープンした。ただし、誰が運営当番になるのか、どう運営していくのかなど、末崎町の住民同士での十分な話し合いがオープンまでに行われたわけではなかった。オープン当初はボランティアが集まらず、オープンから10日ほどが経過した頃、パートを雇用して運営するのはどうかという話が運営メンバーから出てくることになる。

2013年6月29日、最初の運営会議が開かれた(写真5)。運営会議では、パートの雇用、運営時間、木曜を定休とすること^[6]、飲物の値段、他の団体や個人がグループで利用するための手続き、運営メンバーの役割などが議論され、運営するための最低限の決まり事が定められた。そして、末崎町の住民1人がパートとして雇用されることになった。

その後、運営会議は7月5日、7月26日にも開かれた。7月26日の運営会議では、毎月継続して運営会議を開くことが提案され、以後、毎月の定例会として定着していくことになる。

パートの雇用と辞職

2013年7月から、週5日の当番をパート、日曜の当番を運営メンバーがボランティアで担当する体制での運営が始まったが、パートは2013年9月末で辞職することになった。

2013年10月からは再びボランティアのみでの運営が始まった。しかし、次第に特定の人に負担が集中するなど、ボランティアだけで運営するのは大変だという声があがるようになり、2013年11月末から12月上旬にかけて、再びパートを雇用するのはどうかという話が出てくる。12月16日に定例会と別に開かれた運営会議では、今後の運営のあり方が議題とされ、パートの雇用についても話し合われた。

先に述べた通り、2013年10月からボランティアのみでの運営が始まってしばらくすると、ボランティアだけで運営するのは大変だという声があがるようになったが、ボランティアが集まらない理由で運営を休むことは1日もなく、この時期にボランティアを担当した住民の多くは、現在でも運営に関わり続けている。そのため、この時期は運営メンバーの輪を広げることに繋がったという側面もある。



写真3 毎月の朝市

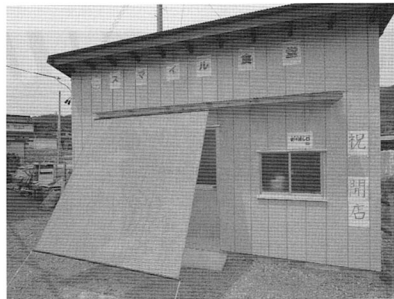


写真4 食堂のため屋外に建設されたキッチン



写真5 最初の運営会議



パートの雇用と理事への就任

2014年1月13日から、3人のパートを雇用しての運営が始まった。パートに入れ替わりはあるが、月・火・金曜の当番をパートで、水・土・日曜の当番をボランティアで運営する体制は、現在まで続いている。

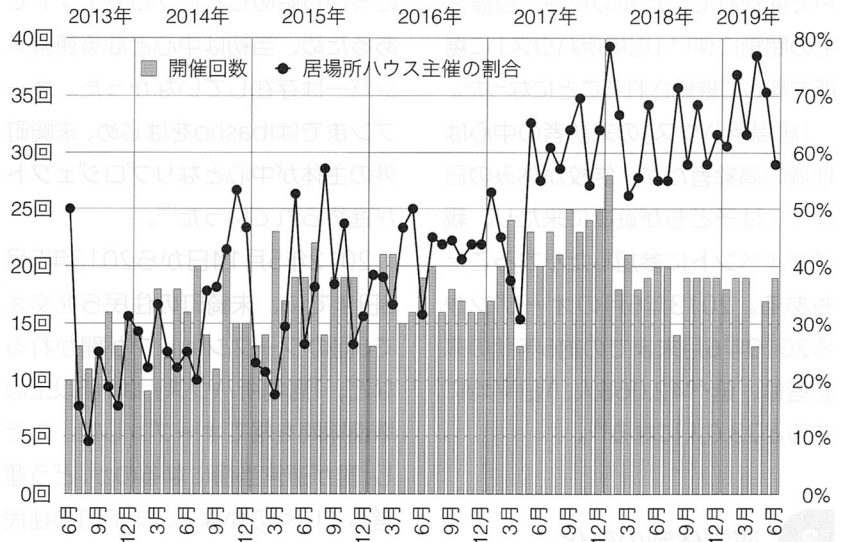
2014年5月23日に開かれたNPO法人の総会では(写真6)、それまで中心となって運営を担ってきたメンバーを含む、末崎町の住民6人が理事に就任することが承認された。理事に入れ替わりはあるが、末崎町の住民が理事に就いていることは現在まで変わっていない。

このように「居場所ハウス」の歩みを振り返ると、オープンから約1年をかけて、運営体制の基礎が築かれたと捉えることができる。

4 運営内容の変化

「居場所ハウス」は、カフェ、食堂の運営が基本になっているが、生花や手芸、郷土料理、健康体操、ノルディック・ウォーキングなどの教室、歌声喫茶や会議、食事会などの集まり、音楽の演奏会、季節の行事など、様々なグループ活動・イベントが開かれる時間帯がある(写真7~8)。

グループ活動・イベントの開催回数は、当初は約10~15回と少ないが、2014年後半になると20回を超える月が出てくるなど、徐々に増加している(図1)。主催者を見ると、「居場所ハウス」が主催するものの割合は、オープン直後の2013年6月を除けば、オープンから約1年間は約10~30%と小さい。その後、2014年後半には50%を超える月が出てくるようになり、2017年半ば以降はさらに割合が大きくなっている。



*「学びの部屋」の開催回数はグラフには含まれていない。

図1 グループ活動・イベントの開催回数の推移

当初、「居場所ハウス」が主催するグループ活動・イベントの割合が小さいのは、グループ活動・イベントを企画し、実行するだけの体制がまだ整っていなかったからだと考えることができる。

2013年11月24日、「居場所ハウス」が主催する初めての大きなイベントが行われた。半年間の運営を継続できたことを感謝するとともに、

地域への浸透をさらに図ることを目的とする「居場所感謝祭」である(写真9)。「居場所感謝祭」では、敷地にテントを張って、食品、手芸品、軽食などのコーナーをもうけ、月見台(縁側)を歌や踊りなどの舞台として利用したが、このスタイルはその後の大きなイベントでも採用されている。

2014年2月上旬、運営メンバーの女性がひな祭りを提案した。子ども



写真6 2014年5月23日のNPO法人の総会



写真7 生花教室



写真8 仮設住宅の元住民による同窓会



写真9 居場所感謝祭

たちを招待して、紙芝居、ひな人形の前での記念撮影、カラオケなどを行い、ひな祭りにまつわる食事をするという内容である。この提案がきっかけとなり、3月1日にひな祭りが開かれることになった。ひな祭り前後の期間には、地域に伝わる土製の人形が展示された(写真10~11)。その後、2014年5月3日には鯉のぼり祭り(写真12)、2014年7月13日には一周年記念感謝祭という大きなイベントが開かれた。

ひな祭り、鯉のぼり祭りは、子どもを対象とするイベントである^[7]。「居場所ハウス」は、当初から多世代の人々にとっての場所にするを目指してきたが(写真13)、それまで子どもを対象とするグループ活動・イベントはほとんど行われていなかった。ひな祭り、鯉のぼり祭りは、高齢者が自分たちの世代だけでなく、若い世代に対して何ができるかを議論することを通して実現されたという意味でも、重要なイベントである。

末崎町の住民6人の理事への就任が承認された2014年5月23日の総会では、補助金に依存せずに運営

していくため、食事の提供や産直など、運営の核となる活動を確立させることが議論された^[8]。これは後に、2014年10月からの朝市、そしてキッチンカーによる軽食の提供、2015年5月からの食堂として実現することとなる。運営体制に加え運営内容の点でも、この日の総会はその後に大きな影響を与えるものであった。

5 空間の変化

「居場所ハウス」の建物は、ワークショップで出された意見を取り入れて設計された(図2)。しかし、実際に運営が始まると、不足しているものや使いづらい部分が出てきたため、運営メンバーは様々なかたちで建物内外の空間に手を加えてきた(表2、写真14~15)。

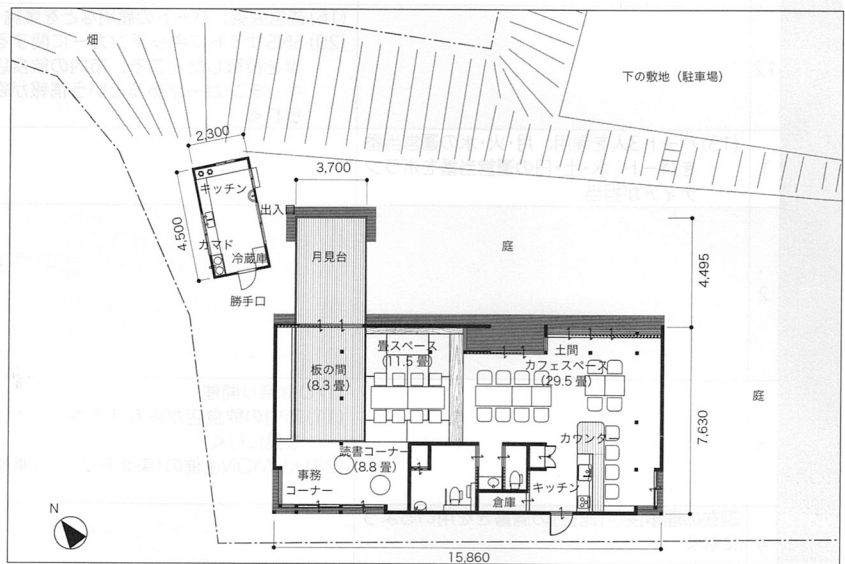


図2 居場所ハウスの空間



写真10 ひな祭り



写真11 ひな祭りにあわせて展示された土製の人形



写真12 鯉のぼり祭り



写真13 多世代交流と記された看板



写真14 オープン直後の様子



写真15 オープンから約1年後の様子



表2 オープンから約1年間の主な出来事

年	月	運営体制	運営内容	空間
2013	6	(13) オープニングセレモニー。週7日の運営当番をボランティアが担当	(29) 最初の運営会議。パートの雇用、木曜を定休日とすることなどを議論	
	7	(1) 木曜を定休日とする。週5日の運営当番をパート、日曜の運営当番をボランティアが担当	(26) 3回目の運営会議。以降も毎月開催することを確認	(22) 道路沿いに掲示板を設置
	8			(5) 道路沿いに看板を設置 (27) 敷地法面に竹で作った安全柵を設置
	9		(4) 末崎地区サポートセンター主催の「居場所健康クラブ」が始まる(現在は居場所ハウスが主催する「居場所健康サロン」として継続)	(18) 建物正面壁に看板を設置 (29) 市内のカフェから借りたグランドピアノを設置
	10	(1) パートの辞職に伴い、週6日の運営当番をボランティアが担当		(4) ロフトの物置にあがる梯子を作り始める (29) 和室板の間に畳マットを敷く (30) 和室奥にテーブルを置き事務スペースとする
	11		(24) 最初の大きなイベント「居場所感謝祭」開催	(6) 和室本棚前に照明を追加[依頼] (8) カウンター席の奥に棚を設置 (8) 本棚を和室に増設
2014	12		(16) 運営会議。パートの雇用などを議論 (20) SNSサイトにキッチンカーに関する記事を投稿したところ、市内の飲食店にキッチンカーがあるという情報が寄せられる	(19) 和室の板の間に敷く畳マットを追加で購入 (21) 薪ストーブのための煙突を設置[依頼]
	1	(13) パート3人を雇用。月・火・水の運営当番をパート、水・土・日の運営当番をボランティアが担当		(16) キッチン奥の倉庫に収納棚を設置
	2			(17) 土間と和室の間にあった柱を撤去[依頼] (17) 表に月間予定を掲示するための木枠を作る (22) 建物横手の倉庫に扉を設置 (26) キッチン奥に勝手口を設置する工事が始まる[依頼] (27) 下の敷地に降りるため法面に階段を作る
	3		(1) ひな祭り開催 (11) 市内の飲食店が所有するキッチンカーを見に行く (28) KUMON主催の「東北トリップ」開催	(5) 土間に浸水防止の処理を行う[依頼] (18) 寄贈されたコブシの木を敷地北側斜面に植樹 (27) 土間のコンクリートに砂埃防止のためのワックスを塗る
	4	現在の理事長が「館長」の肩書きを用いるようになる		(6) 鯉のぼりのポールとなる木を設置 (16) コンクリートのテストピースを搬入し敷地内に花壇を作る
	5	(23) NPO法人の総会で末崎町の住民6人が理事に就任	(3) 鯉のぼり祭り開催 (15) 市内の飲食店が所有するキッチンカーを見に行き、内部の設備を確認 (23) NPO法人の総会で、運営の核になる活動として食事の提供や産直を行うことを確認	(17-19) 寄贈されたモミジ、ツツジを植樹 (22) 道路沿いの看板を設置し直す
	6		(3) 生花教室が始まる (7) 市内の飲食店よりキッチンカーを借りる	(上旬) 敷地内の北側斜面を畑とする (中旬) キッチンカーのための水道管工事[依頼] (15頃) ロフトの物置に落下防止・目隠しのための板を設置
	7		(13) 一周年記念感謝祭。キッチンカーを活用して軽食を販売	

* ()内の数字は日を表す。

* 空間の部分で「依頼」と記載しているのは末崎町内外の業者、大工などに依頼(発注)したもの。それ以外は、「居場所ハウス」のメンバー自身が行ったもの。



写真16 建物正面壁への看板設置



写真17 本棚の設置

建物

オープンから半年までの間には、建物正面壁の看板、ロフトの物置にあがる梯子、棚や本棚の設置など、主にオープン時点で不足していたものを追加する行為が行われている(写真16~17)。

オープンから半年が経過する頃には、和室板の間に畳マットを敷いたり、和室の本棚前に照明を追加する行為が行われる。2014年に入ると、土間と和室の間にあった柱を撤去したり、勝手口を設置したり、土間部分に浸水防止の処理をしたり、土間部分のコンクリートに砂埃防止のためのワックスを塗ったりと、以前に比べて規模の大きな行為が行われるようになる(写真18)。

「居場所ハウス」は、「様々な活動に対応できるようにワンルームで、柱によってゆるやかにつながる空間にしたうえで、テクスチャーなどの違いによりそれぞれの場所に明確な領域をもたせる」という設計者の考えから(生越ほか、2014)、土間と和室を緩やかにつなげるための柱が間に設置され、和室と屋外の月見台を緩やかにつなげるために、和室の一部が板の間とされた。また、古民家の雰囲気を残すために和風の照明が採用され、土間には現代的な要素を取り入れるため、コンクリートの打ち放しとされた。

しかし運営を続けていくうちに、「土間と和室の間に柱があると使いづらい」「和室の畳と板敷きの境に段差があると危ない」「図書スペースが暗い」「出入口が一方にしかないのは不便である」「大雨の時に土間部分に水が流れ込んでくる」「打ち放しのコンクリートは砂埃が立って衛生的ではない」といった意見が、運営メンバーから出されるようになった。上

にあげた行為は、こうした意見への対応として行われたものである。

オープンから1年が経過する頃には、ロフトの物置への落下防止・目隠しのための板の設置や、ブランドピアノの土間から和室への移動などが行われているが、それまでのような規模の大きな行為は行われなくなる。その後も同様に、月見台のペンキを塗り直す、土間の床にペンキを塗る、照明を増設・交換するなど、メンテナンスが中心となっていく。

屋外空間

当初の計画では、道路から玄関までは舗装された通路・駐車場とされる計画であった。しかし、住民が作りあげていくプロセスを大切に、オープン後に出てくる要望や提案に柔軟に対応するためには、屋外なるべく手をつけず、必要に応じて手を加えていくようにしたいと考えられた。こうした考えから、屋外は舗装されないことになった。

オープン後、屋外空間に対しても様々な形で手が加えられていく。オープンからの約半年間は、道路沿いに掲示板や看板を設置したり、法面に安全柵を設置したりと、建物と同様、主にオープン時点で不足していたものを追加する行為が行われている(写真19)。

2014年に入ると、植樹が行われたり、花壇や畑が作られ始めたりするようになる。3月18日には寄贈さ

れたコブシが、5月17～19日には寄贈されたモミジ、ツツジが植樹された。4月16日には、コンクリートのテストピースによって花壇が作られ(写真20)、6月には敷地北側の斜面に畑が作られた。現在、植樹された木々は大きく育ち、花壇、畑も続けられている。

オープン当初に設置された道路沿いの看板は、見やすくするために2014年5月に一旦撤去され、高さをあげて設置し直された。

2015年に入ると、食堂を運営するためキッチンの建築が始められる。キッチンを活用した食堂の運営が2015年5月から始まることで、「居場所ハウス」の運営は大きく変わっていく。

6 場所を作りあげる当事者

「居場所ハウス」は、オープンから約1年をかけて運営体制の基礎が築かれたと捉えることができるが、同じ時期、運営内容と空間にも、現在につながる出来事が生じている(表3)。オープンからの約半年間には、オープン時点で決まっていなかったこと、不足していたことへの対応により、試行錯誤しながら運営体制、運営内容、空間が作りあげられていった。オープン約半年後から1年後には、現在の運営につながる出来事が集中して生じており、空間も大きく変化している。

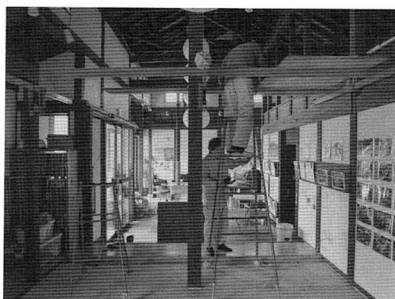


写真18 土間と和室の間の柱撤去



写真19 法面の安全柵のための竹を搬入



写真20 花壇の手入れ



表3 居場所ハウスの変化

時期	運営体制	運営内容	空間
オープン ～約半年後	<ul style="list-style-type: none"> ■ボランティアのみで運営（～6月30日）、1人のパートを雇用（7月1日～9月30日）、パート辞職に伴いボランティアのみで運営（10月1日～）と運営体制は変化 ■6月29日の最初の運営会議で、運営するための最低限の決まり事が定められる →運営会議は後に、毎月の定例会として定着 	<ul style="list-style-type: none"> ■グループ活動・イベントの開催回数は（後に比べると）少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ■看板や掲示板、ロフトの物置にあがる梯子、法面の安全柵など、オープン時点で不足していたものを追加
約半年後 ～約1年後	<ul style="list-style-type: none"> ■1月13日から複数のパートを雇用し、月・火・金の当番をパート、水・土・日の当番をボランティアが担当する運営体制となる →現在まで継続 ■5月23日に開かれたNPO法人の総会で末崎町の住民6人が理事に就任することが承認 →理事に入れ替わりはあるが、末崎町の住民が理事に就いていることは現在まで継続 	<ul style="list-style-type: none"> ■グループ活動・イベントの開催回数はやや増加しているが（後に比べると）少ない ■最初の大きなイベント「居場所感謝祭」開催 →テントを張り食品、手芸品、軽食などのコーナーを設け、月見台を舞台とするスタイルは、その後の大きなイベントにも引き継がれる ■子どもを対象とするひな祭り、鯉のぼり祭り開催 ■5月23日に開かれたNPO法人の総会で食事の提供や産直が提案 →後に朝市、食堂として実現し、現在まで継続 	<ul style="list-style-type: none"> ■本棚前への照明の追加、和室板の間への畳マット設置、土間と和室の間の柱の撤去、勝手口の設置、土間の浸水防止の処理など、運営を通して出された意見に対応 →空間が大きく変化 ■植樹が行われたり、花壇や畑が作られたりする →現在まで継続

高齢者を中心とする住民が当事者となり「居場所ハウス」を作りあげる上では、東日本大震災後という時期、末崎町という地域の特性、運営メンバーをはじめとする住民の思いなどが大きく影響しているが、これらに加えて次の点も重要だと考えることができる。

余地があること

「居場所ハウス」は、末崎町の住民らと交えたワークショップが開かれるなど、1年以上の準備期間を経てオープンした。しかし、オープン時点で全てが決められたり、作りあげられたりしていたわけではなく、運営メンバーはオープン後に運営体制や運営内容を徐々に決めていった。

建物はワークショップで出された意見をふまえて設計されたが、運営メンバーはオープン後に不足していたものを補ったり、使いにくい部分を改善したりすることで、空間を徐々に作りあげていった。

これは一般的に想定されるプロセス、つまりオープンまでに計画し、オープン時点で完成させ、オープン後に利用が始まるプロセスとは異なっている。「居場所ハウス」でも、2013年6月13日のオープンは暫定的な完成として大きな節目だったが、計画、完成、利用の段階が明確に区切られているわけではない(図3)。

オープン時点で全てが決められたり、作りあげられたりしていなかったことは、オープン後の運営において解決すべき課題だと認識された

が、住民が「居場所ハウス」に関わる具体的なきっかけを見出すための余地でもあった。

繰り返し述べているように「居場所ハウス」で特徴的なのは、運営体制、運営内容というソフト面に限らず、空間も徐々に作りあげられてきたことである。空間に手を加える上では、建物が手を加えやすい木造であること、屋外が最初から舗装されていなかったことは重要である。空間にも、手を加える余地があったと捉えることができる。

オープン後に、活用できる運営協力金が確保されていたことも重要である。「居場所ハウス」は、「ハネウェル・ホームタウン・ソリューションズ」からの基金を受けて建築されたが、オープンまでに基金を使い切る

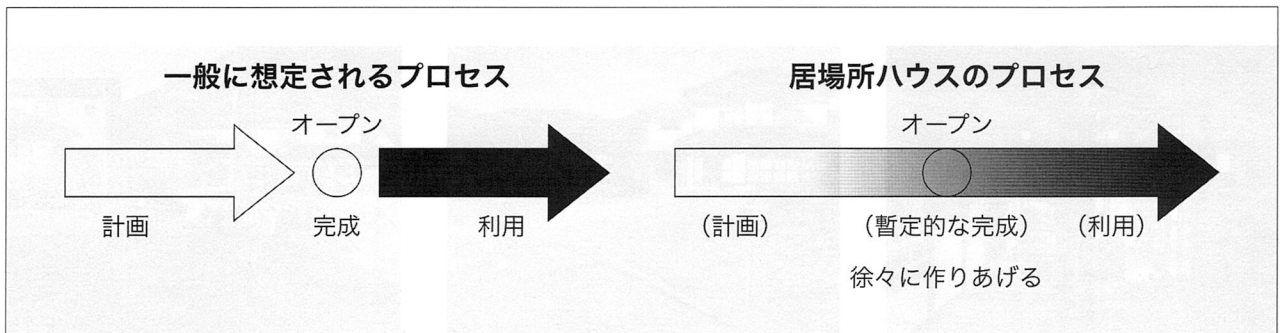


図3 場所を作りあげるプロセス

のではなく、オープン後に必要になった備品を揃えることができるように、基金の一部が運営協力金として確保されていた。運営協力金を使うにあたっては、既成品を買うのではなく、なるべく材料を買って自分たちで作って欲しいという希望があったため、本棚、棚、ロフトの物置にあがる梯子、看板、掲示板などは材料を購入し、かつて建築関係の仕事についていた運営メンバーの男性が中心となり、制作していった。この男性は現在でも、運営に中心的に関わっているメンバーの1人である。

目に見える変化を伴うこと

「居場所ハウス」の運営体制の基礎が築かれていくプロセスは、目に見える変化を伴っている。居場所感謝祭、ひな祭り、鯉のぼり祭りという大きなイベントは、運営メンバーがそれまでと違うかたちで空間をしつらえることで、一時的に目に見える変化をもたらした出来事である。空間に手を加える行為は、オープン時点で不足していたものを補ったり、使いにくい部分を改善することを通して、空間を目に見えるかたちで変えていくことである。

目に見える変化とは、空間に自分たちの活動の結果が蓄積されていくことを認識できること、それを共有できるようになることを意味する。住民が運営に関わろうという意志を抱くことで、大きなイベントを開いたり、空間に手を加えたりすると同時に、空間の変化を認識し、共有することで、「ここは自分たちの場所だ」という意識が醸成されるという側面がある^[9]。

運営体制の基礎が築かれた時期と、様々な目に見える変化が生じた時期が重なっていることから、このように考えることができる。

地域との関わりで場所が成立していること

場所に関わる具体的なきっかけを見出すための余地が重要だとしても、ここで疑問が生じる。それは、余地は次第になくなっていくのではないかということである。実際に「居場所ハウス」でも、オープン時点で決まっていなかったこと、不足していたことへの対応が行われたが、時間の経過とともにこのような行為は減少している。

これは今後も注目していきたい点だが、次の2つの可能性があるとして現時点では考えている。

①1つは、場所の運営を継続することは定期的な手入れ(メンテナンス)を必要とすることである。例えば、「居場所ハウス」では月見台や土間のコンクリートのペンキの塗り直しや、家具の修繕が行われているが、これらは定期的に行う必要がある。農作業、花の手入れ、草刈りなど自然との関わりで、定期的に必要になる行為もある。手入れの内容は地域により異なるが、これらは場所に関わるきっかけを定期的に生み出すという意味で、余地を生み出すものと捉えることができる。

もう1つは、「居場所ハウス」は地域と無関係に成立しているのではないことである。朝市、食堂は補助金に依存しない運営を確立する目的もあるが、まず何よりも、飲食店や店舗がほとんどない地域の状況に対応するために始められたものである。「学びの部屋」は、仮設住宅閉鎖後に自学自習ができる場所が必要だという要求を受け始められたものである。いずれも、オープン時点では具体的なかたちで想定されていなかったもので、「居場所ハウス」では地域の要求に対応することで新たな活動が始められている。これらは、地域との関わりを通して「居場所ハウス」という

場所の新たな可能性(余地)が見出されてきたものと捉えることができる。

場所にある余地は、人々が関わる具体的なきっかけを見出すことを可能にし、関わりの結果が目に見える変化をもたらす。それを目の当たりにするすることで、「ここは自分たちの場所」だという意識が共有される。そして、地域との関わりにおいて、場所に新たな場所の可能性(余地)が生み出されていくのである。

〈注〉

- [1] 筆者は「居場所ハウス」がオープンする少し前の2013年5月から大船渡市に移り住み、「居場所ハウス」の運営・調査に携わってきた。本稿は、筆者のフィールドノートなどの資料に基づいて執筆している。「居場所ハウス」が担う役割については、田中(2016)、なる「居場所ハウス」のこれまでの歩みについては田中(2018)を参照。
- [2] Ibashoの8理念は以下の通り。
- ①「高齢者が知恵と経験を活かすこと」(Elder Wisdom)、
 - ②「あくまでも「ふつう」を実現すること」(Normalcy)、
 - ③「地域の人たちがオーナーになること」(Community Ownership)、
 - ④「地域の文化や伝統の魅力を発見すること」(Culturally Appropriate)、
 - ⑤「様々な経歴・能力をもつ人たちが力を発揮できること」(De-marginalization)、
 - ⑥「あらゆる世代がつながりながら学ぶこと」(Multi-generational)、
 - ⑦「ずっと続いていくこと」(Resilience)、
 - ⑧「完全を求めないこと」(Embracing Imperfection)
- (清田ほか、2014)。Ibashoがフィリピン、ネパールで進めるプロジェクトは田中(2019)を参照。

- [3] 2018年4月からは「学びの時間」と名称を変更し継続されている。
- [4] 来訪者数はゲストブックよりカウントしている。来訪者数にはパート、ボランティアによる運営当番も含まれている。
- [5] オープンまでに次のような主体が末崎町外から関わった。
Ibashi: 理念の提唱、コーディネート、ワークショップの開催、国際NGO・Operation USA: プロジェクト・マネジメント、ハネウェル社: 建設資金等の提供、社会福祉法人典人会: ローカル・コーディネート/事務局、小澤氏: 古民家の提供、北海道大学建築計画学研究室: 基本設計、有限会社伊東組: 施工。
- [6] 近くにある末崎地区公民館「ふるさとセンター」の休館日が月曜であることから、「居場所ハウス」の定休日は木曜に決められた。ただし、2017年5月1日から「ふるさとセンター」の休館日は、日曜・祝日に変更されている。
- [7] 2014年3月28日には、KUMONが主催する「第3回東北トリップ」の受け入れを行った。「第3回東北トリップ」には、英語でのコミュニケーションを学ぶ全国の小・中学生、世界各国の学生キャンプリダー、KUMONに通う末崎町の小学生ら合わせて約40人が参加した。「居場所ハウス」のメンバーは郷土料理を用意した。
- [8] この日の総会で補助金に依存しない運営が議論された背景には、複数のパートの人件費をどう確保するかという課題があり、これは現在でも課題になっている。現在の運営につながる基礎が築かれたこの時期は、補助金に依存しない運営を確立するという課題が始まった時期でもある。
- [9] 新潟市の「実家の茶の間・紫竹」の

運営者は、空間について「一番いいのはやっぱり空き家だと思ってます。どうしてかって言うと、荷物を置きっ放しにできるじゃないですか。自分たちのカラーが出てきますよね。…(中略)…。公民館とか自治会館だと、次に借りる人のためにそこ置いとくわけいけないでしょ。だから、荷物を置きっ放しにできないから、限られた荷物の中でやっていこうとなりますよね。」と話す。ここでは、荷物を置くというかたちで空間に活動が蓄積されることが、「自分たちのカラー」を生み出すことにつながる事が指摘されている。「実家の茶の間・紫竹」については田中(2017)を参照。

〈参考文献・資料〉

- ・生越美咲 森傑 野村理恵 (2014) 「大船渡市末崎町「ハネウェル居場所ハウス」の設計意図と使いこなしの比較—東日本大震災被災地域の環境移行を支えるコミュニティカフェに関する研究—」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』
- ・清田英巳 アレン・パワー 高橋杏子 田中康裕 原田麻穂 (2014) 『Ibashiカフェ—大切にしたいこと—(2nd Edition)』Ibashi
- ・田中康裕 (2016) 『「まちの居場所」が担う意味—岩手県大船渡市居場所ハウスの試みから—』・『財団ニュース』高齢者住宅財団 Vol.135
- ・田中康裕 (2017) 『「まちの居場所」の継承にむけて』長寿社会開発センター・国際長寿センター 2017
- ・田中康裕 (2018) 『岩手県大船渡市居場所ハウスの歩み—プロダクティブ・エイジング実現に向けた先駆的取り組みの考察—』長寿社会開発センター・国際長寿センター
- ・田中康裕 (2019) 「フィリピンとネパールにおけるIbashiプロジェク

ト」・『財団ニュース』高齢者住宅財団 Vol.146

- ・松岡洋子 (2011) 『エイジング・イン・プレイス (地域居住) と高齢者住宅: 日本とデンマークの実証的比較研究』新評論
- ・間宮陽介 (1999) 『同時代論』岩波書店
- ・居場所ハウス <https://ibashi-house.jimdo.com/>
- ・Ibashi Japan <https://ibashi-japan.org/>

どうも対話が変わる大見こ目

プロフィール



田中康裕
(たなか・やすひろ)

Ibashi Japan 代表
千里ニュータウン研究・情報センター
事務局長

2007年、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。大阪大学大学院特任研究員、清水建設技術研究所研究員を経て、2013年より岩手県において「居場所ハウス」の運営・調査に携わる。2014年より米国ワシントンDCの非営利法人・Ibashiがフィリピン、ネパールで進めるプロジェクトのサポートを行う。2015年よりIbashi Japan副理事長、2018年よりIbashi Japan代表。大阪大学大学院在籍時から大阪府の千里ニュータウンにおいてまちの居場所、アーカイブ作りに関する研究・実践を続けており、2012年より千里ニュータウン研究・情報センター事務局長。

主な共著に『環境とデザイン (シリーズ〈人間と建築〉3)』(朝倉書店、2008年)、『まちの居場所』(東洋書店、2010年)。ウェブサイトは<https://newtown-sketch.com>。